

東京都のコンクールに 出したかんそう文

がつこうだいすき

(武蔵台) 一年

ののむら ゆうり

あたらしいがつこうさん、だ
いすきだよ。

さいしよは、わたしもがつこ
うにくるときはどきどきしたけ
れど、すぐになれてたのしくな
ってくるよ。がつこうさんもど
きどきしていたんだね。わたし
とおなじだね。

はじめは、ようむいんさんの
おうちになりたかったのかな。
こどもたちががつこうにくるま

で、ようむいんさんとどんなおはなしをしたのかな。
すぐにおともだちができてよかったね。こどもたち
に、だいきらいっていわれたときは、かなしかつた
ね。でも、だいじょうぶだよ。がつこうさんには、
たくさんいいところがあるからね。

がつこうさんは、はじめてだからわからないかも
しれないけれど、がつこうさんはべんきょうするど
ころなんだよ。がつこうは、たのしいし、いろいろ
なことがべんきょうできてだいすき。まどからみえ
るおはな、すごくきれい。

わたしがいちばんすきなべんきょうは、さんすう
だよ。いま、さんすうでながさをくらべているよ。
つくえやのおどのながさをくらべているよ。こくば
んのながさをはかったらとてもおおきかったよ。べ
んきょうががんばるね。らんどせるのいろ、わたしに
にあっているんだ。いいわすれていたけれど、おん
がくのじゆぎょうもすきなんだ。ぴあのおとをき
くと、やさしいきもちになるよ。がつこうさんもわ
たしのうたきいてね。もっとおともだちとなかよく
できるように、がんばるね。たいへんなこともある
けれど、でもやっぱりがつこうがだいすき。

がつこうさんが、

「あしたもまたきてくれるかな。」

といっていたね。だいじょうぶだよ。みんながつこ
うさんのことがだいすきになっているよ。あしたは

あんしんして子どもたちをみていてね。

わたしは、あなたががっこうさんでほんとうによかったとおもうな。いつもがんばってくれてありがとう。あしたもよろしくね。

アダム・レックス文

クリスチャン・ロビンソン絵

なががわ ちひろ訳

「がっこうだってどきどきしてる」

(WAVE出版)

がっこうはたのしいよ

(上鷺宮) 一年 きむら さな

がっこうはどきどきしないとおもう。わたしは、このほんをよむまえはそうおもいました。でもそのがっこうは、とてもどきどきしていました。がっこうがどきどきしていることをしって、びっくりしました。

このがっこうにはじめて子どもたちがきたとき、

子どもたちは、がっこうなんていきたくない、がっこうなんてつまらない、と行っていました。そしてがっこうがかなしくなっていたとき、わたしはとてもかわいそうになりました。だから、子どもたちに、がっこうはとてもたのしいよ、っていいたくなりしました。

わたしは、かみさぎのみやしうがっこうがだいすきです。プールでみんなといろんなことをして遊ぶのがとてもたのしいです。やすみじかにみんなでおにごっこをすることもたのしいです。みんなでべんきょうをすることもたのしいです。とくにじをかくことがとてもたのしいです。それから、きゅうしよくをたべることもたのしいです。たのしいことがいっぱいあるから、わたしはがっこうがすきです。

かみさぎのみやしうがっこうも、みんながうれしいことをしたら、とてもうれしいとおもいます。たとえば、みんながげんきにあそんでいたらとてもうれしいきもちになるとおもいます。まいにち、みんながげんきにわらってあそんでいたら、とてもう

れしいとおもいます。でも、みんながいやなことをしたり、がっこうをよごしたりしたら、とてもいやなきもちになるとおもいます。もっとみんなでがっこうをたいせつにしたいとおもいます。あそびもべんきょうもみんながたのしむがっこうにしたいです。このほんにでてきたがっこうも、もっとたのしいがっこうになってね。

アダム・レックス文

クリスチャン・ロビンソン絵

なががわ ちひろ訳

「がっこうだっどきどきしてる」

(WAVE出版)

ぞうさんたちへ

(中野本郷) 二年 すどう 光 里

ジョン、トンキー、ワンリー、げい当を見せて、えさをもらおうとしたんだね。げい当を見せれば、前のように、えさがたべられるものね。わたしは、

一生けんめいなぞうさんたちに、

「がんばれ。」

と言いたかったよ。でも、しいくいんの人も、ずっと大切にしていたぞうに、えさをあげられなくて、つらかったと思う。

三頭ども、とてもえさがほしかったんだよね。来る人に、

「えさをください。」

って、いつも言っていたね。ずっと、おなががへっていたんだよね。自分だったら、ないたり、つかれたりしてしまう。

もう、ついにうごけなくなっちゃったね。ぞうさんたちは、しにたくないけど、えさをもらえないから、生きていけなくなっただね。くるしかったね。こわかったね。

どうぶつ園のじゅういさんは、どうぶつのびょう気をなおしてくれる。でも、せんそうのときは、どくのくすりをのませた。せんそうは、たたかいのため、どうぶつをころしてしまふ。今の日本は、せんそうはないけど、いのちをむだにしちゃいけない

と思う。

せんそうで、ばくだんがおちてきて、ぞうさんたちも、こわい思いをしたと思う。きつと、「せんそうがなければ、ころすつもりじゃなかった。」と、どうぶつ園の人たちみんなが、ずつと思っていたと思う。ジョン、トンキー、ワンリー、ころされて、いい気もちじゃなかったね。本当は、もつともつと、たのしい生活をしていたかっただと思っっているよね。今は、たぶん天国のどうぶつ園でくらししているのかな。いつかきつと、生まれかわってきてね。そのときに、また会いたいよ。生まれかわったら、げい当をして、ごはんをおなかいっぱいたべてね。そして、お話もしようね。

こんどこそ、たのしいみらいがまっているよ。

土家由岐雄 「かわいそうなぞう」

武部本一郎 絵

(金の星社)

わすれられないおくりもの

(桃花) 二年 か せ はると

ぼくは、「わすれられないおくりもの」という本を読みました。

このお話は、アナグマがとしをとってしんでしまい、ほかのどうぶつたちが、すぐかなしみながらアナグマに教えてもらったことを話し合うお話です。

どうしてこの本を読もうと思ったのかというと、おばあちゃんにすすめられて、小さいころからずっと読んでいたからです。

ある日、かえるとかけっこをした思い出のおかしのぼったモグラが、しんでしまったアナグマにおれいと言いたくなつて

「ありがとう。アナグマさん。」

と言ったところが心にのこりました。ぼくもおばあちゃんが生んでしまったら、とてもかなしいです。だから、どうぶつたちのかなしさもすこしわかる気がします。この本をはじめて読んだときは、ときどきなみだが出ました。

アナグマは、生きものの中で一ばんもの知りなんだなと思いました。なぜかという、今のとしましぬのはそうとおくはないということまで知っているからです。そして、アナグマは、しぬときまでみんなにいろいろなことを教えてあげていたことがすごいなあと思いました。

ぼくのおばあちゃんも、とてももの知りです。ぼくもおばあちゃんから、本の読みかたや文しよの書きかたなど、たくさん教えてもらいました。いろいろなことを教えてくれるおばあちゃんに、ありがたいないつも思います。きつと、お話に出てくるどうぶつたちも同じ気持ちだったのだと思います。

ぼくは、この本を読んで、自分のいのちを大切にしたいと思いました。さらに、もっとたくさんの方を教えるてもらいたいです。おばあちゃんにも長生きしてほしいです。そして、おばあちゃんに

「今まで教えてくれてありがとう。」
とつたえたいです。

スーザン・バーレイ作・絵 小川 仁央訳

「わすれられないおくりもの」 (評論社)

家族のために

(西中野) 三年 高はし やまと

ぼくは、「金色のクジラ」という本を読みました。この本をえらんだのは、おばあちゃんに主人公がぼくと同じ三年生だからとすすめられたからです。

さいしよの方は、少し話のないようがむずかしいと思えました。でも白血びようやこつずいしよくについて分かって、大へんだと思えました。

この本では、主人公の弟が白血びようというびよう気になります。白血びようとは、血えきのがんです。白血びようは、まだなおすくすりがないので、たすかる方ほうは、こつずいしよくしかかないそうです。

ぼくが、心にのこつたところは、主人公のつとむが弟のゆう一に、こつずいえきを、あげたことです。こつずいしよくは、だれのこつずいでもよいわけ

ではなくて、かたの合うこつずいをいしよくしなければなりません。つとむは、ゆう一をたすけるために、こわい気持ちやいたいのをがまんして、手じゅつをうけました。つとむは、ゆう一をたすけたくてがんばって手じゅつをうけたのだと思いました。ぼくだったらこわくてないてしまうかもしれません。ぼくは、夏休み中に、ねっ中しようになつてしまい二日間びょういんで点てきました。それだけでもつらかったし元気になるのか不安でした。だから、つとむはとてもゆう気があるし、強いし、やさしい人だと思いました。つとむが家族を大切にしているから、家族は大切なんだなあと思いました。ぼくが、家族のためにできることは、おうちのお手つだいです。なぜかと言うと、お手つだいをすると、おうちの人が楽になって休む時間ができるからです。

この本を読んでうれしかったことはつとむのこつずいいしよくがせいこうして、ゆう一が元気になったことです。つとむは、手じゅつがせいこうしてうれしかったと思います。ぼくも、つとむの手じゅつがせいこうしてゆう一がたすかってよかったし、う

れしかったです。ゆう一は明日が大すきです。明日がたくさん集まるとたいいんして「一年生になれる。」と明日が来るのをいつも楽しみにしていました。そのためにたくさんのつらい、くるしい日をのりこえて、一年生になれてランドセルをせおって小学校に行くことができよかったです。と思いました。

ぼくは、この本から、家族の大切さを学びました。ぼくも、家族がこまっていたら、はげましたり、手つだったり、その人の力になれるようにやさしい人になりたいと思います。

岸川悦子「金色のクジラ」

(ひくまの出版)

「大きい一年生と小さな二年生」を読んで

(桃花) 三年 中尾 樹 里

わたしは、「大きい一年生と小さな二年生」という本を読みました。この本をえらんだ理由はお母さんがおすすめてくれて、どんなお話なのか気になったからです。

主人公は体が大きいのにあまえんぼうな一年生、まさやと体が小さくても強気でしつかり者でけんかが強い少女、あきよの二人です。

ある時、まさやは一人で一本スギの森まで行ってあきよのとりにたがっていたホタルブクロという花をとりに行きます。わたしはこの場面を読んで少し不安になりました。その理由は二つあります。一つめは通学路も一人で歩けないまさやがうす暗い森を歩けるのかな、と思ったからです。二つめはわたしもまさやと同じようなけいけんがあるからです。それはわたしが二年生の時でした。図書館に一人で行く時に急に道が分からなくなってしまい、結局人に聞いてと中までつれて行ってもらった事があったからです。なので自分と同じような事になってしまうのではないかと不安になりました。でも、まさやはあきらめずにがんばったのでホタルブクロをとる事が出来ました。この場面を読んだ時に「まさや、よくやったね。」と心の中に強くひびきました。

また、わたしはこの物語からゆう気をもらいました。それはあきよがけんかをする場面です。三年生

のいじめっ子が、あきよのことを「ちび」と言った時わたしはその子に對しておこりたくありません。なぜそう思ったかというのと、とし下の子に對してかわいそうだなあと思ったからです。さいしよは、けんかなんてこわいなあと思っっていたけれど、あきよがけんかをするたびにくじけずにたちむかうすがたがいんしょうてきでした。あきよがびくともせず、なきもせず心配するまさやにわらいかける場面からあきよの心の強さをかんじました。わたしもあきよのように、友だちがかなしんでいる時によりそってあげられる人になりたいです。

あきよたちがまさやの家までむかえに来てくれてあきよに手を引かれながらいっしょにこわいがけの道を通ったり、一年生かんげい会でペアになったりしました。だんだんページをめくっていくと、まさや、あきよ、あきよの友だちのまり子の三人で力を合わせてホタルブクロをとりに行っていたのでまさやとあきよの仲が深まっていくのが分かりました。

このお話を読んで学んだことは、友だちの大切さと勇気です。友だちがいなくなってしまうと何も出

来ないし、勇気がないと強くなれないと思いました。
これからは友だちを大切にしてなんでも自信を持つ
て努力してみようと思います。

児童文学 古田 足日文 中山 正美絵
「大きい一年生と小さな二年生」

(偕成社)

最高のものを手に入れるには

(武蔵台) 四年 丸 田 春 音

「オーガスト・プルマン君、表彰を受けに来てく
ださい。」この一言を読んだ時、私までうれしくなり
ました。そしてとても心に残りました。この本は、
生まれつき顔に変形がある主人公、オーガストが学
校へ行って、みんなときずなを深めながらみんなの
心を変えていくお話です。

オーガストは、いやなことがあっても、学校に行くことをやめませんでした。その努力がとてもすごいと思いました。たとえばオーガストは、仲が良かった友達にかけでこそそと悪口を言われても、友達をなかなかつくれなくても、がんばって学校に行き続けました。私がオーガストと同じ立場になったら、そんなことはできなかったと思います。オーガストは全校児童の前で、がんばった人として表彰されました。それは一年間のごほう美だったのだと思います。

私も、同じようなくない験があります。私は、習字で準初段に合かくすることがゆめでした。このゆめをもつまでは、集中して習字に取り組むことができませんでした。けれど、このゆめをもったことで、集中して習字に取り組むことができるようになりました。私は、がんばって月二回の練習にはげみしました。「細く書くところと太く書くところのちがいははつきりさせて書きましよう。」というアドバイスを生かして書いたり、止めるところは力強く書くなどのコツを考えながら書いたりしました。すると、準初

段に合かくすることができました。この時はとてもうれしかったです。そして、がんばって練習に取り組むことは大切だと感じました。がんばって字を書いたことで、ごほう美として準初段に合かくできたのだと思います。

でも、ぎやくにがんばってできずに失敗をしてしまったこともあります。夏休みの自由研究をなかなかしないでなまけていたら、最後の日になってあわててやることになってしまいました。その結果、やろうと思っていたことの半分以下しかできなくて、中と半ばな作品になってしまいました。さらに、夏休みが明けて学校へ行ったら、みんな努力をしてすてきな作品を作ってきていました。作品をならべると、一つだけ中と半ばな作品を置くことになって、とてもはずかしい思いをしました。このときは失敗したなあ、と後かいました。次からは失敗しないように努力を続けたいです。

この本から考えたことは、努力を続けたらいつかむくわれるということです。そして、最高のものを手に入れるには、努力を続けることが一番だと

分かりました。今、私は習字で初段を目指して毎日努力しています。それからこう筆も級が上がるように、ふだんからていねいに字を書くようにしています。これからは、一度やると決めたことは、あきらめずに最後まで努力を続けていきたいと思えます。そして、自分にとって最高のものを手に入れたいです。

R・J・パラシオ

「ワンダー wonder」

(ぼるぷ出版)

世の中という電車の乗客

(啓明) 五年 木野村 舞

学校の土曜公開で、「いじめ」をテーマに学級会をしました。その時に集団生活について深く考え、きっかけにこの「きみの町で」という本を見つけ、深く考えてみたいと思いいこの本で感想文を書くことに決めました。

この本は、「こども哲学」の付録として書かれたもので、「気持ち」「いっしょに生きる」「自由」「人生」などをテーマに、生きることが好きになるヒントが書かれている本です。

私は、「ぼくたちは、みんな電車の中にいる。世の中という名前の電車に乗り合わせた乗客だ、ぼくたちは誰もが。」という言葉が心に残りました。その電車には、乗っている人の数だけ正しさがあり、他の人の正しさとは一致しない。だから人は心がぶつかったり、すれちがったりしてしまうのだと強く感じました。その人にはその人なりの良いところ、悪いところがあり、あの人にはまたちがう良いところ、悪いところがある。だから時々、ぶつかりもするけれど、足りない所を補うことで助け合うことができると思います。

私は、この本にあるような経験をしたことがあります。それは、友達関係についてです。お互いに上手く気持ち伝わらず、けんかや気まずい空気になってしまい、陰で悪口を言われて嫌な気持ちになりました。しかし、自分は悪いことをしていないと思

いあまり気にしていませんでした。けれど、このことが長く続いたので解決しようと思いききました。相手が何も答えずに立ち去ってしまいました。このことで、私の行動は正しかったのかなやみました。それでも、自分の考えは相手に伝えないと相手も分かってくれないので伝えたことは間違いではないと思いました。ただ、伝え方がどうだったのか、相手に届くように伝えられたのか。しかし、相手も同じ気持ちで向き合ってくれなければ理解し合えないと感じました。

この経験から、人の数だけ考え方があり、お互いに伝え合わなければ理解し合えないと学びました。

集団の中で全員が同じ考えをもっているとは限らないし、全員の思う通りになるとは限りません。だから私は自分の考えをしっかりと伝えて、他の人の考えにも耳をかたむけられる人になりたいと思います。そして、陰口など自分がされて嫌なことは他の人にしない人になりたいです。

もし、世の中という名前の電車に乗り合わせた乗客ひとりひとりが、周りの人の考えに耳をかたむけ、

自分がされたら嫌なことは人にしないという気持ちをもつ余裕があったら、その電車は居心地が良くない世の中はもっと良くなるのではないかと思います。このようなことを今回の読書から考え、まずは私から心がけて行動したいと思います。

重松 清「きみの町で」

(朝日出版社)

泣きたいときには、くちぶえ！

(桃花) 五年 春日 咲音

くちぶえをふいている番長ってどんな男の子なんだろう。いつもけんかをして、えらそうにくちぶえをふいているのかな。私は図書館で見かけたこの本が家に帰ってからもずっと気になってしまい、どうとう母にねだった。

小学四年生のツヨシのクラスに転校生のマコトがやってきた。なんと番長というのは、マコトで実は女の子だった。ツヨシとマコトが一年間過ごした思

い出を、大人になったツヨシがもう一度ふり返るのがこの物語である。

この物語のマコトはかっこよかった。病気で亡くなったお父さんの遺言の通り、困っている人を助け、いじめっ子たちに立ち向かっていったからだ。私は読み進めていくうちに、マコトはかっこいいだけではなく、強いことに気がついた。ふと私はクラスの意見発表の授業を思い出した。ある題材のときに、私だけ意見が違い、こ立した。周りにはみんな敵のようを感じた。私は自分の考えを言い通すことができずに泣き出してしまった。状況は違えど、マコトはクラスの女子全員に仲間はずれにされても負けなかった。私は授業の中だけで心が折れそうだったのに、マコトはどんなにつらかった、悲しかったのだらうと考えると、心がぎゅっとしめつけられた。マコトのこの強い気持ちは、どこから生まれたのだらう。きっと、お父さんの遺言があったからだと思う。ひよつとしたら、マコトが強い心の持ち主で、お父さんとの約束を守りたいと思っていたからかもしれない。

くちぶえ番長というのは、私の考えていたちょっと悪いイメージの番長ではなくて、ヒーローという意味だった。正しいことをつらぬいて、簡単には泣かない番長にならう。もし、泣きたくなったら、くちぶえをふこう。くちぶえは、心の強さを表す、マコトなりの考えだと思う。

ツヨシも、私と同じ意見だったと思う。だから、一番の友達になれたのだと思う。私もこの本の中に入って、マコトとツヨシに会いたい。友達になれたら、悪いことに立ち向かうだけではなく、言っただけのことがある。

「ヒーローでも、友達の前だったら、泣いてもいいんだよ。」

そう言ったら、マコトはどんな顔をするだらう。そして、もし私が

「マコトみたいな強い心を持てるかな。」

と聞いたたら、マコトは本のセリフのように、

「あつたりまえでしょっ！」

と答えてくれそうな気がする。

大人になっても忘れられない大切な友達を見つけ

たい。私も大人になったときに、だれかに会いたい
と思ってもらえる人になりたい。この本を読み終え
てから、そう思った。

重松 清「くちぶえ番長」

(新潮文庫)

今を生きるお年寄りのために

(塔山) 六年 三 國 正 悟

人を大切に思うことは、あたりまえのことでもあ
り、むずかしいということでもある。人を大切に思
う時、ついおこりたくなってしまう時もあるだろう。
その難しい挑戦をしているのが「介護士」の人だ。
ぼくは、「奮闘するたすく」という本を読んだ。この
本を選んだ理由は、最近介護という言葉をよく聞く
ようになり、興味をもったからである。

この本は夏休みの自由研究で、デイサービスの様
子を調べることになった主人公のたすく佑の物語だ。調べ
ている介護施設に佑の祖父が通うようになったり、

施設のおじいさんやおばあさんと触れ合ったりする
ことで、佑の考え方が変わっていく。

佑の祖父がデイサービスに入ったところは、「おさる
のかごや」というゲームをやる時に、

「そんな子どもっぽいことはやらん」

と言ったり、勝手に施設を歩き回ったりして介護士
さんの話に全く聞く耳をもとうとしない。この場面
を読んでいるとき、自分の祖母のことを思い出した。

以前に実家に帰省したとき、認知症の祖母が、一
人で家から出ていってしまったことがあった。そこ
から祖母のことが少しこわくなった。どんな行動を
するか分からないからだ。前まで元気だった祖母が
認知症になり、料理すらできなくなってしまった。
ぼくは、そんなこと信じられなかった。そして、ぼ
くの名前も忘れてしまうことがあり、心配に思うこ
とがあった。

そんな不安なぼくの心をひびかせたのはこの言葉
だった。

「こっちまで若返るねえ。」

とおばあさんが手をさわる場面だ。この場面を読ん

だどきに、おばあさんは子どものが好きだから手をさわったのだと感じた。思えば今ぼくが使っているランドセルを買ってくれたのは祖母だった。夏休みやお正月には、いつも笑顔でぼくをむかえてくれた。きっと祖母もおばあさんと同じように、子どもが好きなんだと思う。だからこそ、(祖母を大切にしていこう。)という考えをもつことができた。

読み始めは、「介護」や「デイサービス」のイメージがあまりわかかなかったが、読んでいると言葉の意味だけではなく、介護施設には様々な工夫があることを知った。指をはさみにくいように戸が横開きになっていたり、簡単につかめるように階段の手すりが波状になっていたりしている。きつとどこの介護施設もお年寄りのためにこのような工夫をしているのだろう。

ぼくは、この本を読んで今を生きるお年寄りの人を大切にしなければいけないと感じた。これからは祖母だけではなくお年寄りの人が困っているときに、積極的に助けてあげたい。以前に地域の介護施設で中学生や高校生が介護のお手伝いをしているのを見

たことがある。そのような体験にも取り組んでみたい。

まはら三桃 「奮闘するたすく」 (講談社)

犬たちの思いを胸に

(緑野) 六年 佐藤 奏 瑛

「何、これ。」

私はたまたま姉の部屋にあった本を手にとった。その本の名前は「犬たちをおくる日」。表紙には悲しそうな目で私の方を見つめている犬の写真がのっていた。私はこれしかないと思い、本を読み始めた。

この本の舞台は愛媛県にある動物愛護センターだ。センターにはたくさんさんの捨て犬や野犬が運ばれてくる。毎日沢山の犬の命が灰となり捨てられている現状を描いている。

この本で初めて知ったことが沢山ある。一年間平均で約四千頭の犬がセンターに集められ命をうばわれている。人と同じ命なのに、自分がほしい物た

めに、お金のために犬をセンターにつれてくる人が何人もいる。親からどうしてもこづかいがほしいなら野犬を拾い、五百円もらいなさいと言われ、野犬をセンターにつれてくる子供もいた。その後、その犬がどうなるのかを知らないのだ。何より心に残ったのは、体を寄せ合って眠る犬たちの写真だ。もうすぐに死んでしまうと分かっているかのように、たがいをなぐさめ合うように、体を寄せ合い眠っている。私はその写真を見て、心が痛くなった。

私はようち園に通っている時に犬を飼っていた。名前はクリスだ。私はクリスとよく散歩したりお昼ねしたりした。出かける時もいつも一緒だった。クリスはもともと祖母の犬で、祖母が亡くなった後、祖父が面どう見きれず我が家にやって来た。老犬で白内障がひどくてほとんど目が見えなかった。それなのに、私が座っているとそばに来て、くっついて横に座った。眠っていると私のところに来て、よりそってねむった。今思うとクリスのぬくもりで私もいやされていたなと思う。

クリスが旅立つ間際はいつも以上に私からはなれ

なかった。まだ年長だった私にはしつこく思えるくらいだった。夜にクリスは亡くなった。信じられなくて悲しくて私は泣いた。涙が止まらなかった。見かねた父は、翌朝私が起きる前にクリスを連れて出かけた。今でもクリスが亡くなったのが信じられない時がある。未だにクリスがいるころの夢を見る。今でもクリスに会いたい、だっこしたい。今、私はクリスの首輪を付けたぬいぐるみと一緒にいる。

私はクリスが大好きだ。犬が大好きだ。犬と人間は家族になれる。喜びをともにわかちあえる。「犬たちをおくる日」を読んで私はくやしい気持ちでいっぱいになった。

人間の問題なのに、犬たちは関係ないのに、なぜ沢山の犬が殺されなくてはならないのだろう。今の私にこの現状を変えることはできない。でも私は命をうばわれた犬たちをけして忘れてはならないと思う。

体をふるわせながら寄りそうようにして眠っていた子犬。骨と皮だけで今にもたおれそうな老犬。本で出会った、命をうばわれた沢山の犬たちを、私は忘れない。

犬たちの思いを胸に、これから出会う目の前の小さな命を大切にしたい。

今西乃子「犬たちをおくる日」

—この命、灰になるために生まれてきたんじゃない—
(金の星社)